イタリア文学

土肥秀行

二〇二〇年ほど、イタリアのニュースが世界にあふれたことはなかった。三月から五月まで連日、日本でもイタリアの新型コロナウイルスの深刻な感染状況が報じられていた。欧州諸国に先行してウイルスの蔓延に直面していたイタリアでは、ロックダウンにより街から人がいなくなると同時に、死が日常にあふれていった。世界の人々の想いが、イタリアの悲劇に注がれていく。やがて感染範囲が欧州全域に広がると、余所からイタリアに寄せられる関心は、現在から過去にシフトした。闇の只中にいるイタリアの人々が、古典の光に救いを見出していたからだった。危機に瀕しては歴史に立ち返り、そこから学ぼうとする、そのポジティブな姿勢が、五月以降、イタリアから外へと発信されていった。それはイタリアの深刻な状態に慄いていた世界の人々を励ますこととなった。

古典とは、一四世紀のペストの蔓延を背景としたボッカッチョ『デカメロン（十日物語）』、そして再びペスト禍に襲われた一七世紀のミラノを舞台とするマンゾーニの歴史小説『いいなづけ』である。この過去の二作こそ二〇二〇年のイタリア文学を象徴しているだろう。お仕着せでない古典の必然性に人々は気付き、学校で読まされた過去を払拭し、自発的に再び読みはじめたからである。特にマンゾーニからは、人々の行動学の普遍が学べる。「塗屋」が病をふりまいているというわさに煽られ、無実の人をリンチしてしまう集団心理は、今回もまたみられたものである。また、あらゆる小説の起源といってよいボッカッチョの作品からは、ペストから逃れて山中の楽園で艶笑譚に興じる富裕層の子弟十名の心の闇、現実に背をむける無為・虚しさを読み取る。

コロナ禍で文学に課された務めを実践するジョルダーノによるエッセイ、『コロナの時代の僕ら』は、イタリアの新聞に発表されてから一カ月も経たないうちに、日本語版が緊急出版された。「コロナウイルスが過ぎたあとも、僕が忘れたくないこと」のために、あえて只中にあるうちに書く。彼は危機のはじまりの段階からすでに次のように見抜いていた。「病気に罹るのは怖くない。では何が怖いのか。作りものの世の中が暴かれてしまうのが怖い」。われわれが直面しているのは新たな問題ではなく、これを機に顕在化した以前からの問題である、ということだ。

多くの人々が、身分の違いなく等しく死に襲われる。そうした恐怖のなか、まさに弔いの一年となった。著名人も犠牲となる。文学史家であり歴史小説の名手であったマルコ・サンタガタが、専門とするルネサンス初期に起こっていたように、疫病の犠牲になるとはあまりにも酷な皮肉である（享年七三）。『神曲』ばかりでなく、『帝政論』にも目をむけ、多面的にダンテを論じた彼のような学者と、二〇二一年のダンテ七〇〇回忌を迎えられるよう誰もが望んでいたはずだ。

古典だけでなく旧作が見直される一年となったのは、新刊や話題作の出し控えが影響している。しかしここ数年減少傾向にあった書籍の売上げは向上した。ステイホームにより、電子書籍とオーディオブックの市場が前年比四割増で拡大し、全体を底上げしたからだ。売上げに占める紙媒体と電子媒体の比は、六対一である。こうして欧州諸国のなかで、数少ない書籍が善戦した国となった。

例年同様、ストレーガ賞とカンピエッロ賞を振り返り、定点観測を継続したい。まずは文学的薫りの高いストレーガ賞であるが、過

去の受賞者ら既に名のある作家たちから推薦されたファイナリスト一二作の頂点に立ったのは、サンドロ・ヴェロネージ作『ハチドリ』だった。一九八〇年代末デビューのヴェロネージは、二〇〇六年度の『静かなカオス』（邦訳あり）に続いて再び栄冠に輝き、はじめてストレーガ賞を二度手にした作家となった。この二作に共通するのは喪失からの再生である。今作では、家族を失い孤独な主人公の眼科医マルコの、究極の救い（＝安楽死）をもとめる歩みが語られる。彼の導き手となるのは孫娘のミライジン（「未来人」、日本語名）で、インフルエンサーから新たな社会運動のリーダーへと成長していく（作者は、環境保護運動家グレタ・トゥーンベリの似像とする）。原題にある伊語コリブリー（ハチドリ）は、地面に落ちないよう必死に羽根を震わせ続ける様を表す擬音のように響く。祖父がコリブリーとして、孫ミライジンと絡み合いつつ筋を展開させる。ヴェロネージにとって、モラヴィア以来の偉大な作家との名声を決定付ける作となった。プロの評価を得るとともに、ベストセラー作家として大衆に支持されるのは、確かにモラヴィアに似る。

一方、北イタリアの産業界のバックアップにより運営されるカンピエッロ賞は、新たな発見をもたらした。メジャーではなく、ローマのインディペンデントから出版された『ボンフィリオ・ラボリオの生と死と奇跡』は、作者のレーモ・ラピーノにとって、古希を目前にして初めて得た成功作である。フォレスト・ガンプさながら、精薄の主人公が、ファシズムの時代から、テロの嵐がふく「鉛の時代」を抜け、新世紀までをしたたかに生き抜く、一人称の物語である。さらに次点の作品が興味深い。詩人として大御所の域に達しているパトリツィア・カヴァッリがこれまで見せなかった魅力を発揮する。彼女が一九七〇年代から書き継いできた一六の散文が、『日本人の歩みで』の名のもとに纏められている。表題となった巻頭作では、首都で暮らすサルデーニャ島出身の独身女性が、方言のコンプレックスから人目を避け、日本人のように、「ちょこちょこ」歩く様が描かれる。

一般の読者目線にもとづく指標として、書き込み数が有効である。オンライン書店サイトの大手ＩＢＳによれば、二〇二〇年に最もコメントの多かった小説は、マルコ・ミッシローリの『貞節』である。ここでは夫のそれであるが、大学教授のカルロは、教え子との不貞を妻マルゲリータから疑われる。それまで問題のなかった夫婦の日常が妄想で侵されていくサスペンスである。ミラノという都市空間を舞台としていることもあって、日本でも根強い人気をほこるブッツァーティにも比され、不条理の世界観を共有する。ミッシローリは、ボローニャ大学でコミュニケーション学を修め、これまで本欄で紹介してきた作家の登竜門スクオラ・ホールデンで創作を学んでいる。今日の小説家の典型である。

日本にいながらイタリア文学の現在を知る機会として、毎年秋に催されているヨーロッパ文芸フェスティバルがある。二〇二〇年はオンライン開催で、イタリアからはソマリアにオリジンをもつ女性作家イジャーバ・シェーゴと、ベテランのアントニオ・モレスコが参加した。共にロックダウン下の執筆活動に触れ、前者は故郷ローマの街が砂漠化したことに思いをはせ、後者は普段聞こえてこない自然のささやかな声に耳を傾け、それぞれインスピレーションを得ていると証言した。モレスコの経験は短編集『樹々の歌声』に昇華された。うち一篇が、関口英子氏により緊急翻訳されウェブ上で読める。

このフェスティバルに協力するのはイタリア文化会館というイタリア外務省に属する公的機関だが、近年、積極的に作家紹介に努めている。イタリア文学が翻訳される機会を促しているのである。冊子『イタリア現代文学案内２０２０』（ＤＬ可）には、一二名の作家が最新作と共に紹介されている。対外イメージの形成という政治的バイアスを免れ、純粋に活きのいい作家の作品を届けんとの熱意あふれるキャンペーンである。

日本の翻訳家たちの熱も冷めてはいない。栗原俊秀氏が、『偉大なる時のモザイク』（カルミネ・アバーテ著、未知谷）の訳業により、イタリア文化財・文化活動省翻訳賞を受賞した。二〇一一年の和田忠彦氏の例に続き、日本での翻訳活動が、イタリアの国家から認められた。その栗原氏は、ゼロカルカーレ作『コバニ・コーリング』ではじめて漫画の翻訳に挑戦したが、シリア内戦を直接レポートする社会派を受容する素地が日本には欠けていた。ロックダウンに陥ったローマの下町生活を短篇動画に活写し、イタリアでは多くのフォロワーを得ていたゼロカルカーレだが、日本では対照的な反応に遭った。

重要な翻訳として挙げておきたいのは、日本でおなじみのウンベルト・エーコ『文学について』（和田忠彦訳）である。生前に編まれた最後の文学論集というだけでなく、自身の創作論も含み、話題性に富む。没五年にしてエーコの全体像がようやくみえてきた。

アニバーサリーとして、映画監督フェデリコ・フェリーニの生誕百年が大々的に祝われるはずであったが、展覧会や特集上映会は中止もしくは縮小開催となった。ただこれを機に、故郷リミニにはフェリーニ博物館が常設されることとなっている。われわれが無関心ではいられない三島由紀夫の没半世紀は、むしろイタリアで積極的に意識されていた。その死にばかり目がいってしまう偏りが、作品論にもとづく作家としての評価と、全体像の把握によって正される機会となった。トリノでの展覧会は中止されたが、チャッパローニ編のカタログは出版され、世界のミシマ研究をけん引する。

年頭と夏季の計四カ月しか開いていなかった映画館の興行収入は前年比七割減、ＥＵ平均値相当であった。オンデマンド視聴が広がり、いまや公開日は、映画館でのそれではなく、ストリーミング開始日となった。話題作に欠け、今後に望みを託すこととなった。

物故者に、映画音楽で知られる作曲家エンニオ・モリコーネがいる（享年九一）。マカロニウエスタンから現代音楽調まで、ジャンルにとらわれず、まさにカメレオン的な作風で巨匠の座にまで上りつめた。もはや受賞はないとされてアカデミー名誉賞を贈られたあとに、八七歳でタランティーノ監督とタッグを組み、初のアカデミー作曲賞を勝ち取ったときの、したり顔が忘れられない。生涯現役を貫いた、不世出の職人的天才である。

〈どい・ひでゆき　立命館大学教授〉

同人誌のご送付、
『文藝年鑑 2021』の
内容についてのお問い合わせは、すべて、
日本文藝家協会 事務局までお願いいたします。

平日 9:30〜17:30（土・日・祝日休）
電話　03-3265-9657
ファックス　03-5213-5672
e-mail: bungei@bungeika.or.jp

文藝年鑑 2021
令和三年六月三〇日発行
編者　公益社団法人 日本文藝家協会
発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社 新潮社
〒一六二-八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部 〇三-三二六六-五四一一
読者係 〇三-三二六六-五一一一
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社
装幀　新潮社装幀室

・乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛てお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
・価格は表紙に表示してあります。

©Nihon Bungeika Kyokai 2021, Printed in Japan
ISBN978-4-10-750047-2 C0091